

海外インターンシッププログラム

派遣国・都市名	オーストラリア 西オーストラリア州 パース
研修先	西オーストラリア州・兵庫文化交流センター
プログラム実習期間	平成 30 年 8 月 21 日～平成 30 年 9 月 8 日
学部/研究科・学年	法学部 3 年

インターンシップ就業実習 報告書

今回のパースの兵庫県海外事務所のインターンシップへの志望動機は、大きく分けて二つあった。一つ目は、今の私にできる最大限で、自分が生まれ育った兵庫県のために何かしたいと思ったからである。二つ目は、海外のインターンシップに参加することで、国内でのみ経験してきた異文化理解を発展させたいと思ったからである。それと同時に、日本語が話せない相手とコミュニケーションをとるための手段として選択的に使ってきた英語を、生活するために必要不可欠な状況において使いたいと考えていた。以下、それぞれについてどう感じ、何を得ることが出来たのか順に述べたいと思う。

まず第一に、兵庫県と神戸大学へのそれぞれの貢献の為に自分なりに考えた方法として、兵庫ゆかりの観光文化資源の一つである生田神社での巫女の経験を生かして、神社の参拝方法や日本人と神社の心の結びつきや捉え方を紹介することと、来年以降もぜひ神戸大学からインターンを取りたいと思ってもらえるような働きをすることを挙げていた。最終日にプレゼンを行うことを大学から事前に伝えられていたので、出国前からその準備を進めていたが、30分という短い時間で、熟知していない自分が宗教に関することを取り上げることの困難さと現地の人に誤解を生んでしまう恐れに気付き、テーマを「歌舞伎における家族の存在の大きさ」というものに変更した。結果として、センターのスケジュールの都合により、インターンによる独自のプレゼンはなくなり、決められたテーマでの小規模なプレゼンと現地の子供たちがセンターに訪れる際に取り組む活動の内容を考えることが、代替の課題となった。その中で、神戸大学を代表する学生としてふさわしい働きが出来たかどうかを自分なりに振り返ってみると、やはり言語が障害となりうまく意思の疎通が取れないことによって、自分自身が困ったり、あるいはセンターの方に迷惑をかけてしまった場面が何度かあった。これらの課題は、指示が十分に理解できていないと感じた時は躊躇わずに聞き直したり、逆にこちらの意図を上手く伝えられていないと気付いた時は、もう一度説明する機会をもらったり、スタッフの方に断って日本語で説明させてもらうことで乗り越えることができた。実際にスクールビジットの際に行ったお弁当のプレゼンと『桃太郎』を題材にした工作活動は、子供達も引率の先生方もセンターのスタッフの方にも楽しんでもらうことが出来た。特に、習字と水墨画による桃太郎の旗作りと、桃太郎のイラストの服を千切り絵で飾り付けるといったアイデアはどちらも私が考え出したものだったので、それが採用され、そして子供たちに楽しんで取り組んでもらえたことで大きな充実感を得ることができた。

所長の方から初日にセンターがビジネス面、教育面、文化面において兵庫県と西豪州の架け橋を担っていることを伺った。私たちインターン生が実際に関わったのは、その

中でも教育と文化の部分だった。実際に、兵庫県内の高校生がパースにある日系企業に見学に行く際に同行させていただいたことや、所長による日本と西豪州の歴史やホームステイの心得についてのプレゼンを一緒に聞かせていただいたことは、私にとっても勉強になった。また、センターで毎週行われる日本語教室に何度か補助として参加することで、日本語はいかに細かい規則で成り立っているかということや、自分があまりにも日本の観光資源やサブカルチャーについて知ろうとしてこなかったことに気付かされた。センターの会員のほとんどが日本の漫画やアニメが好きな方々で、彼らとの普段の会話の中では私がいかにその分野について無知だったため、期待に添えないことが多々あった。なので、アニメ文化など自分に馴染みがないものではなく、身近でその魅力を伝えやすいものはないかと考え、幸いインターン生2人とも関西出身だったことから最終日に簡単な関西弁の講座を行うこととなった。当日はたくさんの会員の方が訪れてくださり、私たちの関西弁のデモンストレーションを真剣に聞いてくださったり、声に出して練習してくださったりと大盛況で終わることができた。

第二の目標として、異文化理解の発展と、ホームステイとはいえ実際に海外での生活をする中で自分の視野を広げることを掲げていた。パース自体の治安は良く、ホストファミリーもセンターのスタッフの方々もとても親切にしてくださったので、現地滞在中に大きなトラブルに巻き込まれることはなかった。日本の家族や友達と常に連絡を取り合っていたので特に離れている実感も当初はなかったが、台風による関西の深刻な被害と北海道大震災の報道を他国のものとして見るのは不思議な感覚だった。家族も友人も特に被害は受けず安心していただけ一方で、帰国間近でも関空が閉鎖されたままだったため、フライトを変更しなければいけない状況になってしまい、自分で現地の航空会社に電話して、英語に苦労しながらもフライトを取り直したことはいい経験になったと思う。しかし、私にとって慣れない国での生活は思ったより心身への負担が大きく、土足の文化やペットのいる生活などに自分では我慢できていると思っていたが、帰国前日から体調を崩してしまい、帰国後にすぐに病院に行くことで過度のストレスや疲れによる急性胃腸炎だと診断された。この経験から、憧れとやる気だけでは他国で生活していくことは簡単ではないことが分かった。

最後に、インターンシップを通じて学生の間にもこのような挑戦を成し遂げたことは今後の糧にきつとなるだろうと感じる。また、今回再確認することとなった、不完全な語学力という課題に対してはさらに努力し続けたい。

感想および意見

私にとって今回のインターンシップは大きな挑戦でした。なぜなら、参加前の私はアジアの外に出たことも、3日以上日本を離れたこともありませんでした。大学入試では、英語が大の苦手科目だった私からしたら数年後に英語圏に25日も滞在しインターンとして就業するなんて想像もつきませんでした。そもそも私が英会話の勉強を始めたのは、単純に外国への憧れからでしたが、英会話教室に通い、大学で使用言語が英語に設定されている授業や、外国人の教授による授業を積極的に取るうちに英語を話すことへのハードルが徐々に下がり、留学生の友達も増えました。彼らと交流する中で、留学に対し

て異国で生活することはきっと大変だろうがきっといい経験になるだろうなどしか考えていませんでした。3回生の前期には、留学生チューターを引き受けたが、その時も具体的にカルチャーショックが心身にどれぐらい影響を与えるのかや、母国にすぐには帰れないことへの心の負担を深く考えたことはなく、日本でいかに楽しく過ごしてもらえるかを概ね考えていたように思います。今回のインターンに申し込む時の私の気持ちとしては、憧れの海外生活への期待と異文化理解を実際に経験して留学生の気持ちに少しでも寄り添えるようになればと考えていました。

帰国した今、滞在期間を振り返るともちろん楽しかった思い出もたくさんあるけれど、やはり慣れない環境が与える心身への負担は大きかったと感じます。日本の様には行き届いていない衛生環境や時間厳守ではない公共交通機関、とても親切にしてもらえるとはいえ他人家族の一員として生活することは、自分では我慢できていると思っていましたが、想像以上にストレスとなっていた様で、帰国前日に急に体調を崩しました。それでもなんとか帰国できたが病院に行くと、過度なストレスと過労による急性胃腸炎と診断されました。

ここまで過酷だった滞在にも関わらず行ってよかったと思えるのは、何事も自分で経験してみないと分からないものであり、想像と現実には乖離が多々あるということのを再認識できたからです。私にとっては、一人で飛行機を乗り継いで外国に行きホテルに宿泊することや、UBERを使って知らない人の車に乗ることもこのような機会がなければ、わざわざ一人で行く必要はないから、なんとなく危なそうだからやめておこうと考えて、少なくとも学生の間には挑戦しなかったと思います。しかし、経験してみることで今後の選択肢や判断材料を増やすことができました。

また、現地の人に日本語や日本文化を教える中で改めて考えてみると、日本語それ自体、それによって作られた概念、日本人の物の考え方のそれぞれが他の国の文化にはない素晴らしい物だと気づくことができました。だからこそ、これまでの様にむやみに海外に憧れを持つ必要はないのかもしれないとも感じるようになりました。もちろん、現状としてグローバル展開を目指す企業はたくさんある以上、自分もそれに対応できる人でありたいが、私の中にある日本人らしさに誇りを持つことは忘れないようにしたいです。

25日間で英語が急成長したとも、十分な異文化理解ができたとも思いません。ただ、私の中でこれまでの自分を越える事が出来た事、日本人であることへの考え方に変化があった事は、明らかに収穫でした。このような機会を与えてもらったことに感謝しています。

